



アルファルファとサイマスターで、 自給飼料の比率が向上!



北海道 別海町別海327-2
(有)デリフファーム福本 福本貴弘さん

人口16,000人のまちに約11万頭の乳牛がいる別海町。牛の頭数はなんと人口の6倍以上。もちろん生乳生産量はダントツの日本一を誇っている。まさに酪農王国と呼ぶにふさわしい別海の地で、牛が喜ぶエサづくりに精魂を傾ける若き酪農家、福本貴弘さんを訪ねた。



《プロフィール》

福本貴弘さん(39)は開拓農家の3代目。昭和7年に祖父が別海町中西別に入植し、昭和42年に父の弘一さん(67)が現在地に移転し酪農に専念、平成23年に貴弘さんへ経営をバトンタッチした。現在飼養しているのは搾乳牛140頭、乾乳牛30頭、育成牛と哺乳牛で110頭。父の弘一さんは主に117haの牧草地を、母の小夜子さん(64)は哺乳牛を担当。貴弘さんと妻の桂さん(40)の間に高校生の息子が二人、中学生の娘が一人の3世代7人ファミリー。

別海ならではの スラリー散布とケレス栽培

別海町にある福本貴弘さんの牧場を訪ねて最初に目に入ったのは、巨大な緑色の円形タンク。ふん尿を溜め置き発酵させるスラリーストアだ。ふん尿が河川に流失して海を汚染し漁業に影響が出ないように、国営の環境保全型かんがい排水事業で設置したもの。別海の牧場はたいてい設置しているそうだ。

ふん尿はいったんこのタンクに入れて、調整槽に移し、下から空気を送って発酵を促進。有機堆肥をポンプで汲み上げて畑に散布する仕組みになっている。スラリータンカー1台で撒くことができるのは約10トンだが、春先はそれが200~300台分の作業。春先だけではなく、1番草が終わった後と秋の、年3回散布するのが通例だという。

福本さんの牧場ではスラリーの散布

だけではなく、以前から土づくりに力を入れてきた。なにしろ父親の弘一さんは、平成16年に別海で初めてアルファルファのケレス栽培に挑戦し、成功させた人物である。

「俺はこんな寒いところでアルファルファなんて無理だっていったんですよ」と笑う福本さん。マメ科の牧草は土壌が凍結すると根がちぎれて枯れてしまうことが多く、根釰地域では育たないといわれてきたからだ。ところがケレスの草の根は横へ横へと広がる。できあがった草地を見て、二人ともびっくりするほどの仕上がりになった。凍結地帯でも越冬できることが証明された現在は、草地の約9割がアルファルファ混播のチモシー草地。いまや町内だけではなく根室まで栽培が普及している。

サイレージが高タンパク、 そのぶん濃厚飼料をカット

「サイレージ用の乳酸菌を使い出したのは5年くらい前かな。うちの親父はどちらかというと牛よりも牧草をみているほうが好きな人間なので、いい牧草ができれば、いいサイレージをつくりたいかならうでしょうね」

去年、登場したサイマスターもさっそく試してみたというので、感想を聞いてみた。「いいですよ、すごく。ムラなく発酵しているのがみてとれる。牛の食べっぷりもいい。成分検査もまんべんなくい



奥行50mのバンカーサイロが4基。冬場は裏手に丹頂鶴を見かけることも



ふん尿を溜めてスラリーとして使う肥培かんがい施設。有機物の分解を促進させ、冬期間は調整槽で貯蔵する



牛舎は搾乳牛・乾乳牛・育成牛にわけて3棟。ほかに哺乳ロボットやカーフハッチを設置した哺乳牛の牛舎も

いスコアが出ました」

サイレージのタンパクが2~4%高くなっているため、そのぶん濃厚飼料を減らすことができる。牛一頭に食べさせるエサの単価の抑制につながった。

「気になるのは高タンパクのせいとか、牛の食べる限界量がやや少なめなこと。ごはんとうりかけの関係に例えるとわかりやすいんだけど、サイレージがごはんなら、濃厚飼料はふりかけ。ごはんには強い味がついているのにふりかけをかけると、おいしくても食べ飽きますよね。かといって味の無いごはんに大量にふりかけかけるのも胸焼けするじゃないですか。現状は五目炊き込みごはん程度に調整しているつもりなんだけど(笑)」

牛の体調や食欲を観察しながら常にエサの調整を考えている福本さん。与えたエサをペロリと食べてくれるのが、なによりの喜びだ。「朝にやって、昼に寄せて、晩に来てみたらエサ場にほとんど残っていない時が、やっぱり一番うれしいかな」と、はにかみながら話してくれた。

輪を完結させる ベストな循環を目指して

エサに気を配っているといっても、乳量アップだけを考えているわけではない。「乳量というより、どちらかという牛

の体に無理がかからないようにしてやりたいという気持ちが強いです」と話す。実際、ケトシスや第四胃変位など採食行動に関わるトラブルはごく少ないそうだ。

「生産は後からついてくるとは思っています。人の都合で乳を出すためのごはんをつくれれば、牛の寿命は短くなる。ムリヤリ出そうとしなくても、ごはんがおいしくて健康なら自ずと長く出してくれるんじゃないかな、と」

いいエサを与えて元気な牛を育て、無理をさせずに長く乳を出してもらおう。それが福本さんの酪農スタイルだ。

「酪農というのは本来、輪をつくる仕事ですよ。いい草を育て、いい草を食べた牛からいい乳をしぼり、肥料をつくって土に還元する。だけど、現状ではどうしてもどこかでほころびが出てくるんですよ。今のうちの牧草ならもう20頭くらいは乳がしぼれるけど、かといって20頭余計に牛を置こうと思えば、そのぶんスラリーが増えてしまう。そうなるとうちちょっと土地が欲しくなる。どこかに負荷がかかるんです。だから今はひとつの輪で完結させるベストな循環を実現させるのが目標かな」

これまで牧草地は主に父親の弘一さん、牛舎は貴弘さんと、手分けをしながら家族総出で取り組んできた今後は新たな形態を模索しなければならないと



敷地内に自前の変電施設を持ち、高圧電力を変換して使用。停電時用の自家発電装置もある

考えている。

「今のところは家族でなんとかまわしています。息子もこれから進学で家を離れるでしょうし、親父が完全に引退になったら、ヘルパーさんを増やすのか、それとも従業員を雇用するのか、いずれにしても外部から手を借りる方法を考えていかなきゃならないと思っています」

家族構成や経営環境の変化を前向きに捉え、柔軟に乗り越えていこうとする福本さん。長期的な視点を持ちつつも、牛たちの今日のごはんを気にかける毎日だ。

(取材日/2013年3月21日)



サイレージ発酵の達人 「サイマスター」

添加してから1日で1万倍に増殖する球菌と、発酵後半でも高い菌数を維持する桿菌を含有。牧草由来のタブルの乳酸菌でおいしいサイレージをつくります。